

(資料4)

前回の資源管理方針に関する検討会からの 課題への対応(研究機関への依頼)について

令和3年10月29日(金)

資源管理方針に関する検討会
～スルメイカ全系群～

水産庁

1 前回の検討会からの課題（水産庁HP議事概要より抜粋）

(5) 田中水研機構水産資源研究所所長より発言：資源評価の更新結果を総括し、スルメイカは単年性の魚種であり、資源量の予測はその年の再生産の成功・不成功で決まってくることから、将来の予測が非常に困難。日本以外の国の漁獲があることも、資源評価を難しくする。データを更新すると、変動することが避けられないため、この点について改めて御理解いただきたい。今後も資源評価の手法の改良を検討し、変動の解明に向けた調査の拡充、資源評価の向上を図ってまいりたい。

(7) 藤田資源管理部長より、これまで議論の総括として、以下の点を挙げた。

- 我が国漁船による漁獲割合の減少が進む中、関係する外国等との適切な資源管理措置の実施を踏まえたTAC管理を進めることが重要との指摘があった。この点は、外国との交渉なので、公の場で具体的な内容を言及するのは適切ではないが、しっかり努力していく。
- 研究機関として、資源評価精度の向上に努力されてきたことは評価。他方、今回の資源評価を踏まえてTACの設定を行うことは、間違ったメッセージになるとの指摘があった。
- 資源評価について、単年生の資源であるが故の難しさ、変動の大きさが、管理の方法にも関連して、改善を進める必要がある。

このような意見を踏まえ、今回は、暫定的に昨年のABC及びTACをそのままとし、今回の指摘及び新しい資源評価結果を踏まえ、再来年度以降のTACについて検討するSH会合を開催し、再度の検討をするということを水産庁として提案した。

2 検討会で提示された課題への対応

課題

- ・ スルメイカは単年性
- ・ 資源量の予測はその年の再生産の成功・不成功で決まる
- ・ 資源量の変動が大きい
- ・ 管理の方法にも関連



対応(研究機関への依頼事項に反映)

1. 漁期中調査の直後に資源評価を行い、その結果をTAC管理に反映できないか

2. ベースケースの漁獲圧一定方策ではなく、
- (1) 獲り残し割合一定方策による管理ができないか
 - (2) 漁獲量一定方策による管理ができないか
 - ① 将来予測に基づく方策
 - ② (外国事例を参考に)将来予測ではなく、過去の漁獲や資源の推移に基づく方策